

宮田亮平 文化庁長官 × 鈴木大地 スポーツ庁長官

日本をおもしろい国に！2人の長官が語る

『bouquet[ブーケ]』創刊の特別企画として、宮田亮平文化庁長官と鈴木大地スポーツ庁長官の対談が実現しました。芸術とスポーツという、一見正反対に感じる2つのジャンルに関わっているお2人ご自身の幼い頃の思い出や、指導者だった頃のお話、そして現在お考えになっていることなど、それぞれの視点から語っていただきました。

司会・企画協力：佐野 靖（東京藝術大学 学長特命・音楽学部教授）

日本の美しさやよさを知ってもらう

佐野 靖：ご多忙の中、お時間をいただきありがとうございます。早速ですが、それぞれの庁で掲げている目標や最新の取り組みをお話ください。

鈴木大地スポーツ庁長官：いろいろあります。スポーツ庁というと、競技スポーツを連想しがちですが、スポーツというのはものすごく幅が広いんです。国民の健康増進やスポーツ・ビジネス、スポーツを通じた地域活性化とか。従来の競技スポーツ以外の取り組みにも力を入れています。

佐野：たしか鈴木長官の博士論文も、国民の健康増進をテーマにされていましたね。

鈴木：たいした論文じゃないのですが。そのようなエビデンスに基づいた、国民の健康増進をスポーツで図っていきたいと思っています。国民全体に資するものですし、社会を変えていくことにもつながります。従来のスポーツの概念からウイングを広げながら、スポーツの価値を高めていくということですね。

佐野：一方、文化や芸術ではその成果が見えにくい部分はありますね。

宮田亮平文化庁長官：スポーツと大きく違うところは「数値」がない。例えば、スポーツには記録があるじゃないですか。でも文化は数値で測れないところが、難しい。ただ、「文化芸術基本法」が制定されたので、それを確実なものにしていきたいと思っています。また、日本人が日本の美を知らない。それを知ってもらうことが私の一大目標です。例えば国宝の材質でも、ヨーロッパが石や金属など素材として強いものが中心であることにに対して、日本は紙や木や土などで脆弱だから、日本人は本物の国宝を見る機会が少なく、ほんとうによいものに触れていない。ほんとうの美しさをどう知ってもらうかを考えています。

鈴木：気付いていないという点では、スポーツも一緒ですよ。今スポーツによる地域活性化に取り組んでいますが、自分の町や村のスポーツのよさに気付いていない。例えば、群馬県みなかみ町のラフティングを発見、見出したのはニュージーランドのかたなんです。

宮田：へえ。

鈴木：まだまだ、スポーツには宝が眠っているんですね。

宮田：それが分かると賑わいになるよね。地方創生にもつながるし。

鈴木：そう、インバウンド（海外からの誘客）にもつながって、いろいろな人が来るようになる。まだ分かっていないですよ、自分たちの地域がいかにすごいかっていうことを。

宮田：それらにちょっと磨きを掛けるだけで、すごくよくなるし。そういうことを伝える「語り部」になることも僕らの仕事。スポーツと文化の両方から扉を開く、つまり双方がタグを組むことがすごく大事だと思う。

皆が「日本人力」を発揮できれば、絶対おもしろい国になると思う
（宮田亮平）



最後に自分をがんばらせるのは、感受性や感動できる心だと思います
（鈴木大地）

文化とスポーツは切っても切れない関係

佐野：2020年の東京オリンピック・パラリンピックがよいきっかけになりますね？

鈴木：文化とスポーツは、切っても切れないところがあります。オリンピック自体が文化ですし、文化のオリンピックもあったわけですし。

宮田：そう、文化にとっても絶対の使命なんだよね。そういう強い意識をもってやりたい。

鈴木：今、スポーツ競技も、音楽や映像との親和性が高くなっています。水泳競技でも、観に来た人が「楽しい」と思えるような、音楽の仕掛けが結構ありますね。試合前にドキドキするような音楽を流すとか。

宮田：最近多いですねえ。

鈴木：選手のほとんどが、ヘッドホンやイヤホンで音楽を聴いています。我々の時代にもありましたけれど。練習前に聴いていた曲が、泳いでいる時に頭の中に延々と流れるんですよ。

宮田：そうですね。実は、僕も作品を作るときに、常に音楽を掛けているんです。たいたりグラインダーを掛けたりしているから、うるさくてよく聴こえないけど、音楽を流す。すると、不思議なリズムが出る。おもしろいですよね。アスリートみたく、ヘッドホンは付けませんけどね（笑）。子どもの頃から、スポーツも大好きなんです。学生時代には少林寺拳法やヨットもやりました。常に自分の体を動かして、新しい自分を見つけるきっかけになるのが、スポーツだと思っている。

「四輪車」構想？

佐野：昨日まで国際会議でバンコクにいたんですけど、タイの観光スポーツ大臣が文化と観光、そして経済を結び付ける話をしていました。

宮田：おお、僕の“三輪車構想”と同じだ。文化庁に来て、文化だけでは無理だなって思ったんです。「文化」と「観光」と「経済」。この3つが一体となると、非常にバランスがいい。一輪車が得意な人ってそうはいないじゃないですか。二輪車は常に走ってなくちゃ、倒れちゃう。三輪車になれば、安定しているし、止まっても冷静にものを見られる。動けば、速く動ける。ときには「文化」がハンドル、ときには「観光」がハンドル。その両方をちゃんと保てるときに、自然と経済力が付いてくる。



スポーツ庁長官
鈴木大地 (すずき・だいち)

競泳選手として1984年ロサンゼルス、1988年ソウル五輪に出場。ソウル五輪では男子100メートル背泳ぎで、日本競泳界に16年ぶりの金メダルをもたらした。順天堂大学大学院を卒業後、米コロンビア大学ボルダー校客員研究員、ハーバード大学のゲストコーチなどで留学を経験。2007年には順天堂大学で医学博士号を取得し、2013年同大学教授。同年には日本水泳連盟会長、日本オリンピック委員会理事に就任。2015年10月より現職。また2016年10月にはアジア水泳連盟副会長、2017年7月には国際水泳連盟理事にそれぞれ選任された。

のを得ないとがんばれない。そのためには、自分の競技以外のさまざまなことをどれだけたたき込むかが大事です。

宮田：うれしいですね。鈴木長官から、まさか「美しさ」の話を聞くとは思わなかった（笑）。

アスリートのパフォーマンスも芸術だ

宮田：美術では、日常の中で、美しさにどれだけ気付けるか、なんですよ。たとえ美しいと思うものが目の前になくても、それを自然に探している自分、それに気付いた自分。そんな自分を「ああ、カッコいいなあ」と（笑）。

鈴木：美しさでいうと、スポーツにも美しさを採点する競技はありますが、速い人とか強い人とかも、美しいんですね。

宮田：ええ、絶対に美しい。

鈴木：水泳は美しさを競うものではないのですが、やっぱり速い人は美しい泳ぎをしている。

宮田：そうだね。世界中に「バサロ」っていう言葉とあの泳ぎ、あのスタイル、あの美しさを見せたのは、鈴木長官でしょ？

鈴木：バサロさんが始めた泳法ですが、実際の競技の中で用いたのは我々日本人選手ですね。とにかく日本人は体格的には外国人選手にかなわないので、創意と工夫で挑みます。

宮田：すぐまねされますけどね。

鈴木：ええ、すぐにルールも変えられてしまうこともありますけど、それでも日本人選手はめげない。「次、次、次」って常に考えています。その人にしかない技とかパフォーマンスは、ある意味、芸術だと思っていますし、それが根付けば文化になると思うんですよね。

宮田：まさにギリシャ、ローマ時代の彫刻は、アスリートのフォルムを美しく造形していますよね。

鈴木：なるほど。そこにスポーツを入れていただけると……。

宮田・鈴木：四輪車になる（笑）。

鈴木：より安定しますよ（笑）。

佐野：その面では、文化や芸術に比べて、スポーツは先を行っていると思います。

鈴木：まだまだだと思っています。だいたいこの10年間でスポーツの規模って、日本ではシュリンク（縮小）しちゃっているんですよ。諸外国は2～3倍に伸びてますけれど。それこそ文化や観光、いろいろなものとうまく結び付けながら、規模を拡大していきたいと思っています。

「感動できる心」が大事

鈴木：スポーツは体を使ってなんぼの世界なんですけど、僕がスポーツをしてきて思ったのは、最後は心の勝負なんですね。

宮田：ほう。

鈴木：最後は「どうやって自分をがんばらせるか」ということを考えないと、がんばれないですよ。人間だから、がんばれない日もあります。そのときに、感受性というか、感動できる心がなければがんばれません。がんばれないときに、どうやってがんばるかっていうと、それこそ音楽を聴いたり映画を観たり……。「あ、きれいだな」とか「これいいな」という気持ちがないと、がんばれないんですよね。感受性や感動できる心、最後はそれが勝負だと思う。

宮田：トップアスリートでも、そんなふうと思うんだ。

鈴木：トップアスリートこそ、いろいろなものから心の栄養みたいなものを

鈴木：勤めていた大学で美術史の授業があって、教員ですけど一番後ろでそういう話を聞いていました。おもしろいし、興味深いです。

宮田：がんばっているときの美しさとか、力が抜けてリラックスしたときのしなやかで、自然な、流れるような美しさだね、両方あるんですよ。

鈴木：おもしろい。がんばっているところはよく見ますが、リラックスしているところはスポーツではあまり見る機会がないですね。

宮田：先ほどの「心」の話は、ある意味リラックスですよ。

鈴木：感動するとたしかに緊張がほぐれて、ちょうどいい緊張になるんです。緊張しないのはだめなんですけれど。

佐野：演奏もうまい人はフォームが美しくて、動きに無駄がない。アーティストもある意味アスリートなんです。

鈴木：そう思います。

ほめられたことは覚えている

佐野：外から見ていると、オリンピック選手っていうのは、学校も行かずにスイミングクラブでずっとトレーニングしているようなイメージですが。

鈴木：学校ぐらい行かせてくださいよ（笑）！ 教科の中では、やはり保健体育が得意でしたが、美術も好きでしたね。粘土で焼き物を作って。

宮田：絵付けして。

鈴木：そう、文様柄を付けて。それをほめられました。うれしかったですね。スポーツ以外でほめられた、唯一の経験です（笑）。

宮田：そういうのって覚えてるよね。

鈴木：覚えてます！ ほめられたことは。

ここが昨日と違うね

宮田：子どもの頃、我が家では毎朝、習字をやってたんですよ。全員で。

鈴木：いいですねえ。

宮田：それぞれ漢字を書いたり、隷書を書いたりね。小学校前の末っ子の僕は、勝手にひらがなを書いてた。すると、おふくろがおもしろいことを言うんだよね、「昨日と違う」って。それが好きでね。おふくろは、僕が昨日書いた字を記憶していて、「ここが昨日と違うね」と言ってくれる。

鈴木：評価してくれている？

宮田：そう、評価してくれるの！ さっきの鈴木長官の「ほめられたことは覚えている」と同じですよ。それで、小学校3年生で書道の授業が始まったときは僕は得意気で、うれしくてうれしくて。

佐野：自由に書いたんですね？

宮田：うん、自由に書いたら真っ赤っ赤に直された。そのときのギャップといたらなかったなあ（笑）。

全員：（笑）。



文化庁長官
宮田亮平 (みやた・りょうへい)

金工作家。新潟県佐渡に蛸型鍍金作家の2代目宮田監堂の3男として生まれる。1972年に東京藝術大学大学院美術研究科工芸専門課程（鍍金専攻）を修了。イルカをモチーフとした「シュプリングエン」シリーズなどの作品で、「宮田亮平展」（個展）をはじめとして、国内外で多数の展覧会に参加。

「日展」内閣総理大臣賞や、「日本現代工芸美術展」内閣総理大臣賞など数々の賞を受賞し、2012年に第68回日本芸術院賞を受賞。

東京藝術大学の学長を10年務めた後、2016年4月より文化庁長官に就任。

心に火をつける

鈴木：スポーツに無関心な人、「スポーツ嫌い」の人を減らそうという話になったら、「冗談じゃない、スポーツ嫌いを放っておいてくれよ」という人が出てきたんです。

宮田：ほう。

鈴木：話をよく聞くと、どうやら「スポーツ嫌い」じゃなくて、「体育嫌い」。学校の体育の授業のせいでスポーツを嫌いになってしまった人が多いんですよ。我々は本当に反省して、技術指導だけでなく、本来人間がもつ体を動かす欲求をもっとあぶり出して、「体を動かすこと自体に魅力があるでしょう」ということを、どんどん伝えていこうとしています。専門家が現場に入って、いろいろなレベルの子どもに対応できるような指導も考えています。

佐野：「音楽嫌い」についても同じことが言えるかもしれません。鈴木長官のおっしゃるような学校の外と中をつなぐシステムがうまく機能するといいですね。

鈴木：今、スポーツではやろうとしています。部活動では、体育の教師でもなく、競技の経験もない教師が顧問として指導しているケースが全体の約半分なんです。だから負担も大きい。そのあたり、もっと外部の人たちにも関わってもらおうという流れになっています。

佐野：本物のアスリートやアーティストのほうが、子どもたちに優しくったり、温かったりしますね。「それはだめ」ではなく、まずは「いいね、いいね」と言ってくれるような印象が強いです。

宮田：それは、なぜかというね、僕は素人だけだと思うのが、例えば、子どもたちがスポーツをしている姿に対して、これに通じるとか、あれに通じるとかが、トップアスリートには分かるから。単に悪い所（短所）を責めない。そうしたいいろいろなおもしろさを学校の中に取り入れるようなシステムを作っていかななくてはならない。

鈴木：私も指導者をやっていましたが、自分の思い通りにしようと思って「ああしろ、こうしろ」と言うと、選手は育たない。

宮田：そうですか。

鈴木：反発はするけれど育たない。もう少しゆったり構えて、ある程度好きにさせていくほうが、どんどん育っていく。だから、やらせるんじゃなくて、「心に火をつける」指導者がいちばんいいって言われてるんですね。

宮田：いいこと言うねえ。

鈴木：やらされてやるよりも、自分からやったときこそ、人間一番力が出るんですね。そのようなことが、我々のコーチングの世界では常識になってきていますね。

宮田：スポーツ・アスリート以外においても人生そのものに言えますね。



対談は文化庁長官室で行われた。左から宮田亮平氏（文化庁長官）、佐野靖氏（東京藝術大学 学長特命・音楽学部教授）、鈴木大地氏（スポーツ庁長官）



司会・企画協力
佐野 靖（さの・やすし）

東京藝術大学教授（音楽教育）。東洋館出版社より『唱歌・童謡の力：歌うこと＝生きること』『文化としての日本のうた』等を刊行。文化庁プロジェクト「アートによる復興支援」等で学校・地域・大学が協働するプロジェクトに取り組んでいる。2016年度より、東京藝術大学学長特命（地域連携、大学連携担当）に就任。

種をまき、肥やし、見守る

宮田：最近思うのは、「マンネリ」と「シリーズ」ってあると思うんだよ。「マンネリ」っていうのは1回やって、それをさらに繰り返していくだけ。一方「シリーズ」にはね、続きがあるのよ。例えば、なんで日本の漫画が世界を席巻するのかというと、いちばんいいところで、続きが来週になっちゃうから。

鈴木：なるほど（笑）。

宮田：そうすると、人はものすごく想像したり発想したりするでしょう？ だから、来週また買おうとするわけですよ。そこがシリーズのすばらしさなんだよね。作品を作るのも、これだけ俺の中でかっこいいと思ったものを作ったのに、次もまた期待を裏切らないようにしようと思うから、年齢を忘れてがんばっちゃう（笑）。

佐野：学校の授業も、「シリーズ」のように次が楽しみと思わせるようにしたいですね。

宮田：それには、音楽、美術、体育の授業時数や単位が少なすぎますね。「日本人力」が発揮できるものって、この3つの中にあるんですよ。それをもっと発揮させれば、絶対おもしろい国になると思う。財産になるはずなんだよ。人間こそ財産なんだから。基礎的な体力、美しさを感じる力、聴くことや表現することの力を付けること、そして鈴木長官がおっしゃった「心」も含めて、全部体と深く関わっている。教育はね、「種をまくこと」「肥やすこと」、それから「見守ること」。土に種をまくと、肥えていれば肥えているほど雑草も生えるんだよね。そんな中で、まいたものがどう芽生え、育っていくのかをしっかりと見守っていくことですね。

鈴木：なるほど、いいお話ですね。我々は芸術、音楽や美術に憧れていますから、目指して、追いかけていきたいと思います。

2017年11月6日
文化庁長官室（東京都 千代田区）



対談終了後。宮田長官が制作した銅鑼を鈴木長官がたたいて握手を交わす様子

『bouquet [ブーケ]』創刊に寄せて



クラシック音楽の現場に毎日足を運び、さまざまな音楽家に取材し、
記事を執筆している朝日新聞社記者の吉田純子さん。
そんな吉田さんに、本誌『bouquet [ブーケ]』の創刊にあたって
ご寄稿いただきました。

文：吉田純子
Text：Junko Yoshida



1971年、和歌山市生まれ。1993年、東京藝術大学音楽学部楽理科卒業、1996年、同大学院音楽研究科（西洋音楽史）修了。1997年、朝日新聞社入社。仙台支局、東京本社学芸部、整理部、文化部（音楽担当）、
広告局を経て、編集委員（音楽担当）、西部本社編集局報道センター（文化）編集委員。
コンサートの取材や国内外の著名アーティストへのインタビュー取材を行っており、
記者としての客観的な視点と、東京藝術大学で学んだ音楽の専門的な視点という二つの立場から書く記事は
核心を突きながらも温かな眼差しを感じさせるものであり、読者から人気を博している。
アーティストからの信頼も厚い。

次号以降の『bouquet [ブーケ]』では、吉田純子さんのエッセイ（不定期連載）をお届けします。

出会ってきた大人たちの熱い思い

この秋、広島で井上道義さん率いるオーケストラ・アンサンブル金沢の演奏会を聴いた
時のこと。週末ということもあり、ふつうの演奏会より地元の子どもたちの姿が目立った。
後半、ベートーヴェンの『田園』がはじまる前、井上さんが突然マイクを手に現れた。
「ごめんなさい。でも、今日は子どもがたくさんいるもので、うれしくてつい……」
ちょっと長い曲だけど、心をしっかり澄ませてみて。鳥の声や川のせせらぎなど、
無限の自然の音色がきこえてくるから——。井上さんは、そう子どもたちに語りかけた。
多くの子どもたちにとって、これがオーケストラの響きとの「初めて」の出会いとなる。
この「初めて」を、井上さんは重く受け止めた。「ひとりも置いてきぼりにはしない」と
いう井上さんの気迫に気付いたオーケストラも、ひときわ密度の濃い風景画を真剣勝負
で描いてみせた。

記者としてさまざまな現場を訪れていると、こんなちょっとした瞬間に、一流のアーティ
ストの「純」な部分に触れてうれしくなることがある。広い世界を足場にする人ほど、
子どもたちへの思いを熱く持たずにはいられないものだということにも気付かされる。

かのクラウディオ・アバドは、ベルリン・フィル音楽監督という重責を終えたあと、
若手オーケストラの育成に心を傾けた。胃がんを患い、上着の肩の線が二の腕のあ
たりに来るほどにやせ細っても、「若者たちの音楽が私の薬」と指導をやめることはな
かった。貧困層の子どもたちに視線を向ける教育財団を2008年に設立したピアニスト
のラン・ランは、「教育に携わるにはまだ早い、という人もいるけれど、『おにいさん』と
気軽に呼んでもらえる年齢のうちに、音楽が社会とどう深く関わっているか、身をもっ
て伝えることができれば」と語った。

11月に来日した90歳のブロムシュテットは、幼い頃、兄と訪れた演奏会でブルック
ナーの交響曲第4番を聴いたことに、音楽家としての人生を決定づけられたという。
心のなかにある楽曲の印象が霧となって消えていかないよう、覚えている旋律を口ず
さみながら帰途を急いだ。一音一音がとてつもなくいいとおしい。この「初めて」こそが、
音楽学者として、そして指揮者としてのブロムシュテットの悠々たる歩みの出発点と
なったのだ。

子どもたちに、最良の「初めて」をプレゼントしてくれる大人たち。大人たちに、音
楽を志す初心をいつも思い出させてくれる子どもたち。新しい船出を迎えるこの雑誌
が、両者を幸福に束ねる礎となることを祈りたい。

吉田純子

日本めぐり

本連載では、日本各地で文化や芸術を支えているかたがたにお話を伺います。第一回は東京都荒川区、伝統工芸「つまみかんざし」の職人・石田一郎さんのお店を訪ね、お話を伺いました。

第一回 東京都荒川区

石田一郎 つまみかんざし職人

東京都荒川区は、大勢の無形文化財保持者（伝統工芸技術保持者）が在住しており、職人50名を超える会員で構成された「荒川区伝統工芸技術保存会」も存在する。まさに「職人の町」です。区を挙げて、江戸時代から伝えられてきた伝統工芸の技術を未来へつなぐための取り組みが行われています。ある秋晴れの午後、住宅街の一角にある「石利商店」を訪れました。ここでは、元荒川区指定無形文化財保持者の父、故石田利重氏（勲七等青色桐葉章受章者）の後を受け継ぎ、石田一郎さんがつまみかんざしを作っています。

日本でたった8人
「つまみかんざし職人」

—— 石田さんは、いつ頃からつまみかんざし職人の道に進まれたのですか？

「父が職人だったからね、両親が朝から晩まで働いているのを見続けて育ったんです。高校を卒業してから3年半は、サラリーマンをしていました。でもあるとき、仕事を継ぐ」

後継者がいない

—— 最近、若い人たちの間で着物が流行しているそうですね。そうだね。でもね、皆が付けるのは造花とかの髪飾りなんだよ」

—— ここにあるかんざしは、どれも美しいのに。

「そう、皆『きれいだね』とは言うけれど、『値段が高いから』と買ってくれないんだよ」

—— 自身でよいと思ったものと、人気の高いものは同じですか？

「まさか！今はね、よいものを作ったって売れないから。例えばこれ【写真①】はよいものだと思うけど、実際は『地味だ』と言われてしまう。赤やピンクで派手なほうが人気だよね」

—— どのように、販売しているのですか？

「昔は注文を受けて作っていたけれど、今の時代、それでは売れない。現在はデパートの催しなどで、2か月に一度くらいのペースで販売しています」

—— お客さんはどのようなかたですか？

「『おばあちゃんと孫』の場合は来てくれても、勝手に買うと、お嫁さんに怒られる」と帰っていく。買ってくれるのは『おばあちゃん・お嫁さん（娘さん）・孫』の組み合わせ。若い家族はあまり買わないよね」

—— 価格はどれくらいですか？

「大きいセットだと3万円、ブローチだと千円だね。今だって売れないのに、消費税が10パーセントになったら、もっと売れなくなるよ。それでも仕事だから続けなくちゃならない。毎日座りっぱなしだから腰は痛いし、右手は腱鞘炎。毎日どこかしの病院通い。もうやりたくないもん（笑）。それに、この世界では後継者問題がある。荒川区は若い職人を増やそうと支援してくれるけれど、難しい。商品が売れないんだから、後継者が育っても生活は厳しいよ」



石田一郎（いしだ・いちろう）

荒川区伝統工芸技術保存会会員。1944年東京に生まれる。高校卒業後、父・利重の下で技術を修得し、今日に至る。1996年、荒川区登録無形文化財保持者に認定。

うと決意して、やらせてくださいと頭を下げた。その後は修行の日々。一人前になるのに、10年以上かかりましたよ」

—— 嫌になることはありませんでしたか？

「何回もありましたよ、いつも叱られていたから（笑）。でも気が付いたら54年が経っていました（笑）」

—— 荒川区はお好きですか？

「もちろん！生まれたときから住んでるからね。ここには、たくさんさんの職人がいますが、つまみかんざし職人は全国でも8人だけ。区内には、私ともう一人、戸村絹代さんというかたがいます。また荒川区では、職人たちが学校へ出向いて子どもたちに伝統工芸づくりを教えている。私も毎月小学校へ行きますよ」

—— 子どもたちと接する機会が多いんですね。

「つまみかんざしは伝統工芸の中でも人気みたいだね。積極的にやってみようとするのは男の子が多い。皆、一生懸命やってくれますよ。中学生になると、この店に来て数人ずつ体験してもらいます」

—— 大変な世界ですね。

「デパートで売るにしても、残った商品を送り返す費用や交通費、食事代、ホテル代は全部自腹。だから売れなければ大赤字。最近では、北海道の北見や、愛媛県の松山の催しでも販売するのだけど、そこではこれらを全て負担してくれるから本当にありがたい」

「鶴」が人気

「とにかくつまみかんざしは売れないからね、自分は鶴を折っているの」

—— 鶴、ですか？

「そう、折り紙の鶴。つながった鶴を折るのをテレビで見ても、自分でも始めてみた。デパートの催しでは、その場で鶴を折って、お客さんにあげることもあります。毎年やってくるから、今ではこの鶴のほう知られている（笑）【写真②】」

—— たくさんありますね。

「例えばこれは500円で、群馬県の薬師温泉の旅館などでけっこう売れるんです。よろしければ、差し上げますよ【写真③】」

—— ありがとうございます！かわいいですね。

「それからね、2007年は東京メトロの銀座線が開通90周年を迎え、全駅がリニューアルされますが、稲荷町駅でのコンセプトは職人の伝統や技を伝えていくことで、私の作品も飾られます」

—— 東京オリンピックもありますし、外国からの観光客にも喜ばれそうですね。

「展示の作業は終電後の深夜遅い時間だから、立ち会いはしません（笑）。どのように飾られるのが楽しみです」

有限会社 石利商店「営業時間 9時～16時（土・日曜日定休）」
東京都荒川区町屋 4-24-17
TEL 03-3895-1187 8 / FAX 03-3892-2073



女性の髪を彩る「つまみかんざし」は、江戸時代から続く伝統工芸品だ。正方形に裁断した絹の羽二重を用い、ピンセットを使って巧みにつまんで作られる



部屋の一角に飾られたつまみかんざし。つまみかんざしは現在、七五三、成人式、婚礼用として主に使われている



【写真①】つまみかんざしのセット。取材時に石田さんが制作していたもの



【写真②】最近では、折り紙でつながった鶴を折り、お客さんに差し上げることも多いという（左下）。一部販売しているものもある（上）



【写真③】記念としていただいた、旅館で人気の鶴のキーホルダー

の校長講話先生



本連載では、学校長を務められた先生が、これまでに学校で子どもたちに語り届けた講話をご紹介します。

第1回は、長野県須坂市立墨坂中学校第18代校長で、現在は須坂市教育長を務めている小林雅彦先生が2011年9月に、音楽会を控えた生徒たちに聞かせたもの。過去にご自身の音楽の授業で体験した不思議な出来事と、生徒たちの声が変わった瞬間について振り返るお話です。

小林雅彦（こばやし・まさひこ）
須坂市教育長

第1回 小林雅彦 先生（須坂市立墨坂中学校 第18代校長）

音楽会に向けて～詩の魂を引き出す合唱に！ 「古時計が動かなくなったことを悲しんでいるのは誰だろう」

毎日、教室から熱の入った合唱の声が流れてきます。どんな顔で歌っているのだろう。私は思わず校長室を出て、わくわくしながら皆さんの教室のほうへ歩いていってしまいます。どの学級も一学期から本当によく歌い続けてきましたね。そしてどの学級も、もう一步のところまできています。残りの日々で、どこまで仕上げられるのか、楽しみでなりません。

仕上げ間近な合唱を聴いていると、思い出すことがあります。

＊ ＊ ＊

今から30年ほど前、私はある山の中学校で教師をしていました。全校生徒が34人という小さな中学校でした。

ある年のこと、秋の郡市連合音楽会に向けて、全校合唱で『大きな古時計』（アカペラ混声四部）を歌うことになりました。生徒は大きな学校と比べられるのを嫌がっていましたが、今の皆さんの学級合唱と同じように、一生懸命に練習しました。

ところが、もう少しで完成という段階になり、ある程度ハーモニーがきれいに響くようになったのに、生徒は何か物足りない表情でした。私も何か足りないような気がしてなりません。原因は3番の歌い方でした。

楽譜を見てもらうと分かるように、3番はおじいさんの死を告げる真夜中の時計のベル音で始まります。この部分は曲全体のクライマックスなのに、録音を聴いてみても、悲しみが伝わってこないのです。

どうしてだろう。本番の2週間前の練習で、私たちは考えました。「3番は小さく歌うって書いてあるけど、小さく歌うと、悲しさというより、やる気がないように聞こえてくる」と生徒は言うのです。私も、どうしたら解決できるかについて、うまく教えてやれませんでした。

その時、3年生のA君が言いました。「本物の古時計を目の前に置いて歌えば気持ちのがのるんじゃないか」と。それがいい、ということになり、村中探したら、のっぽではないけれど、もう動かなかった古い時計のある家が見つかり、学校に寄付してくれました。ところどころ虫の食った跡があるような古時計でした。壊れているところは3年生がボンドで留めて、音楽室に飾りました。

これを見て歌えば、うまくなるかな……。やっぱりだめでした。困った私は、思わず「おい、真夜中って何時のことかな」とつぶやくと、生徒は「12時だ」と言いました。

私が何気なく動かない時計の針をぐるぐる回し、12時に合わせたときでした。突然、鳴るはずのない時計が鳴り出したのです。「えー！」「奇跡だー！」音楽室中が大騒ぎになりました。ぜんまいが壊れているため、時計の音は12時を過ぎても止まりませんでした。はじめはキャーキャー言っていた生徒たちでしたが、だんだんシーンとしてきました。

このときの気持ちをSさんは作文にこう書きました。「時計の音をじっと聴いていたら、『オレももう少しがんばるから、お前たちもがんばれ！』と言われたような気がした」と。

鳴り続ける古時計の音を聴きながら、私は思わず指揮棒を振り下ろしました。そして、生徒は歌い出しました。

真夜中に ベルがなった おじいさんの 時計
：
（以下、『大きな古時計』の歌詞）

指揮をしながら、私はびっくりしてしまいました。今まで、どんなに練習しても出なかった、弱音での生きた音が始めたのです。30年たった今でも、あの瞬間の音を忘れることができません。でも、これで完全に声が変わったわけではありませんでした。

次の時間に、M君が言いました。「悲しいから *p*（弱く）で歌うって言うけど、悲しいのが誰だか分からない」と。私も曖昧でした。

また、全校で考えました。悲しいのはおじいさん、時計、家族……。

おじいさんは死んでしまったから、時計が止まったことを知らない。時計が悲しむなんて変だ。じゃ、誰だ。

そのとき、誰かが言いました。「みなにおしえたのさ」、って言うんだから、男の子じゃないの」「悲しいのはおじいさんの孫の『僕』だ」。

話はどんどん広がりましたが、そのときの結論はやはり「僕」でした。

悲しいのは、大好きだったおじいさんや時計とお別れしなくてはならなくなった「僕」。こう確認し合った頃から、また声が変わりました。

2番で“花嫁がやってきた”ところは、おじいさんの気持ちのがり移ったように、楽しそうになりました。3番の“いまはもう 動かない その時計”の静かな悲しみが伝わるようになりました。音がつながるようになったのです。

連合音楽会の前日、先生方に聴いてもらった時のことです。歌い終わったとき、後ろを振り向くと、時には厳しい指導をしてくださる教頭先生と3年生担任の女性の先生が、2人ともハンカチを出して目を拭いているのです。生徒たちはじっと2人の涙を見ていました。そして、当日、生徒たちは「僕」の気持ちになりきって歌いました。決して完全な演奏ではありませんが、そのときの録音がとってありました。これから聴いてもらいます。

実は昨年3月、この中学校は残念ながら閉校になってしまいました。その閉校式典の日、当時の中学生たちが集まり、校舎とのお別れに、『大きな古時計』を歌いました。遠くは東京から、わざわざこの歌を歌うだけのために駆け付けた人もいたそうです。右がそのときの模様です。

みんな、もうおじさんおばさんになっています。私も行きたかったのですが、卒業式と重なってしまい、行けませんでした。でも、この写真を見る度に、きっと『大きな古時計』はこの人たちの「杖うた」として、あれからずっと心の中で生き続けてきたんだなあ、と感ずることができました。



長野県下伊那郡清内路村立（現：阿智村立）清内路中学校閉校記念同窓会で卒業生が『大きな古時計』を歌う様子（2010年3月17日）

＊ ＊ ＊

さて、本校の墨坂祭が近づいてきました。最初にも言いましたが、皆さんの学級合唱は、「あともう一步」のところまできています。

あとはどうすればいいか、『大きな古時計』の話を参考にしながら、学級で話し合ってみてください。「自分たちの歌に、まだ足りないものは何か」と。

歌の中には、必ず作詞者が詩に込めた詩の魂があります。もう一度、詩に目を向けてください。その中に、きっと『大きな古時計』の「僕の悲しみ」にあたる詩魂が潜んでいると思います。「早く表に出してくれ！」と叫んでいるかもしれません。その詩魂が見えるような合唱にしていましょう。

こう話しているうちに、私は音楽会がとても待ち遠しくなってきました。終わります。
（2011年9月13日、須坂市立墨坂中学校における校長講話）



全校生徒34人と『大きな古時計』で臨んだ「第35回郡市連合音楽会」
（1982年11月24・25日、長野県飯田市 鼎体育館）

『bouquet [ブーケ]』創刊

このたび、教育芸術社より
機関誌『bouquet [ブーケ]』を創刊する運びとなりました。

2018年に、小社の機関誌として現在刊行している
『音楽教育 ヴァン』が創刊15周年を迎えます。
主に音楽や教育にまつわる記事をご紹介している『ヴァン』の取材を通して、
日本各地には音楽という枠組みを超えて地域に根ざした活動や文化芸術など、
もっと多くのかたがたに知っていただきたい出来事が
存在することを痛感しました。
そのため、こうした出来事を紹介しようと、新たな機関誌の制作に至りました。

小さな花束のように、さまざまな文化情報を1冊にまとめ、
手にしたときのうれしさや楽しさも
感じていただきたいという願いを込めて、本誌を『ブーケ』と名付けました。

この『ブーケ』では、今号からスタートの連載「次代につなぐ 校長先生の講話」をはじめ、
次号以降の新連載「震災と復興 ―その先に―」を軸に、
多彩な文化や芸術にスポットを当て、
その魅力や重要性をお届けしていきます。

今後とも『ブーケ』及びに『ヴァン』をどうぞよろしくお願い申し上げます。

『bouquet [ブーケ]』編集部

One day, ワンデー ワンモーメント one moment

フォトエッセイ

写真・文：ヒダキトモコ
Photo・Text：Tomoko Hidaki

ヒダキトモコ

写真家。日本舞台写真家協会会員。
東京都出身、米国で幼少期を過ごす。慶應義塾大学法学部卒業。会社員を経て写真家に転身。音楽誌・経済誌等の表紙・グラビア、各種舞台・音楽祭のオフィシャルカメラマン。ステージ写真、ジャケット写真、写真集等。官公庁や企業の撮影も多数。撮影スタンスは自然体、人の内面的魅力やイキイキとした写真表現を大切にしている。
<http://hidaki.weebly.com>

Ⅰ 枚目

氷河

カナディアン・ロッキーを歩いた。スノーボード・パスの高台に立ち、見下ろすと一面、淡いブルーの濃淡で何層にもつづら折りになった氷河が目の前に広がっている。静けさの中、何とも言えない興奮に胸は高鳴っていく。人々が夜テントで寝静まった頃、時折遠雷のように響く轟音。それは氷河

が動き、きしむ音らしい。きっと人間の一生の何回分もの時間をかけて、少しずつ進んでいくのだろう。壮大な氷河の流れの中では、人間一人の人生の時間など、あっという間かもしれない。

